（ほんだ・しん　青森県立郷土館学芸課研究主幹）

―彙　報―

◎弘前大学国史研究会第八八回例会は、洋学史学会との共催で左記のとおり開催された。

①福井敏隆氏「蘭方医から洋学者へ―佐々木元俊の場合―」

②佐藤賢一氏「弘前藩の測量家　清水定徳について」

平成二十四年十二月九日　（H）

八戸市史編纂委員会編
『新編八戸市史　近現代資料編　都市計画』
『新編八戸市史　近現代資料編　戦争』

竹村　俊哉

このたび、新編八戸市史の近現代資料編が二冊同時刊行となった。既刊の近現代資料編Ⅰ～Ⅳは明治期から現代までを時系列で取り上げたものだが、今回はテーマ別資料編である。市長の巻頭言にもあるように、幾多の大きな災害を乗り越えてきた八戸市は、東日本大震災後も迅速な復旧と更なる災害に強いまちづくりをめざして八戸市復興計画を策定しているところである。『都市計画』と『戦争』は、復興と発展を目指す八戸市にふさわしい二冊である、と言えよう。

○『都市計画』　構成は以下の通りである。

第一章　都市建設構想によるまちづくり

第一節　近代成立期のまちの様相　第二節　大正期の都市建設構想

第三節　都市計画事業の開始　第四節　沈船防波堤の建設

第五節　北奥羽地域経済開発構想　第六節　上下水道の敷設

第七節　八戸の町並み

第二章　新産業都市指定によるまちづくり

第一節　新産業都市指定運動

第二節　新産業都市建設基本計画の推移

第三節　港湾・漁港と後背地機能の整備

第四節　三角地帯と第二工業地帯の建設
第三章　都市計画事業によるまちづくり
第一節　都市計画の概要　第二節　都市計画における交通整備
第三節　土地区画整理事業　第四節　都市公園の整備
第五節　住宅団地造成　第六節　内陸工業地域の造成
第七節　流通団地の整備
第四章　まちづくり構想
第一節　八戸市総合計画の推移　第二節　中心市街地の開発
第三節　まちづくり戦略の動き　第四節　市域の拡大とまちづくり

第一章では、近代八戸の都市建設の手はじめとして、明治初期における小中野村の土地区画整理を取り上げている。これは政府による土地区画整理制度の施行以前にこの地域の地主等によって行われたものであった。続く大正期には、国費による鮫港修築事業がきっかけとなって、八戸町、小中野村、湊村、鮫村の四ヵ町村の合併による市制が構想され、「大八戸建設論」が持ち上がったことや、大正十三年（一九二四）五月に発生した「八戸大火」後は、道路拡幅を基本にした街路整備が進められたことを紹介している。

第二章では、まず新産業都市指定に向けた種々の運動を採り上げ、次に昭和三十九年（一九六四）三月に八戸地区が新産業都市に指定されて以来、六回にわたって基本計画が策定されたことにふれている。第三次までは重化学工業化・高度加工工業の振興に重点を置き、第四次以降は産業構造や技術の高度化を追求する計画に重点がシフトしたことを示した。また、漁港とその後背地機能の充実への取り組みや、昭和十二年の馬淵川改修工事に伴う切替工事によって出現した埋立地「三角地帯」と新産都市指定後の第二工業地帯の造成により臨海工業地帯が形成されていく様子を紹介している。

第三章では、昭和四十三年の新たな都市計画法の制定、同四十四年の都市再開発法の制定、同四十五年の建築基準法の大幅改定を受けて、八戸市都市計画審議会による都市計画の推進の様子を紹介している。次に昭和初期からの交通整備について取り上げ、これまでの街路計画や昭和五十二年に完工した八戸線の高架線化にふれている。また、土地区画整理事業における「八戸方式」、都市公園の整備、住宅団地の造成（宅地開発法立案の契機は、八戸市の建設省への財政的支援の働きかけであった。）、流通団地の整備の変遷に関する資料を掲載している。さらにこれまでの素材産業を中心とした臨海工業地帯に加えて、高度技術産業に対応すべく八戸内陸工業団地の造成について紹介している。

第四章は、文化・観光のまちづくりを踏まえた市民活動の展開やその成果の事例を紹介している。地方自治法に定められている「総合計画」に関して、八戸市の第五次総合計画では「市民力」を結集し、創造性豊かな産業・文化が息づく活力ある「北の中核都市」の実現という考え方が打ち出されたのである。また、昭和四十年代以降の八戸地域広域市町村圏におけるまちづくりの諸様相を紹介している。

個人的には、第一章に示された八戸の工業都市化に関する部分に興味を覚えた。昭和四年の市制施行、都市計画法（旧法）適用による都市計画の本格化、戦時下の「新興工業都市」指定と馬淵川改修工事は一つながりのものであるが、その前段階に、大正末期の「八戸大火」という偶

発事があったことが押さえられており、これにより、八戸の都市化の起点が明確にされている。この都市化・工業化の波に乗って八戸港の変容が始まるわけだが、河川切り替えによって現在の第一工業港が生まれ、戦後の食糧増産政策の下では、岩手県松尾鉱山で産出する化学肥料の原料となる硫黄や硫化鉄鋼の積み出し港となり、大型油槽船（タンカー）を沈設して防波堤にするわが国初の試みがなされるなど、「海から拓く」というスローガンの下で進められていく港湾機能の整備過程に、地域開発の典型例を見る思いである。防波堤整備の際、工期短縮と費用軽減の必要から「沈船防波堤」が採用されていく過程も、面白かった。

○『戦争』　構成は以下の通りである。

第一章　戦時公報

第一節　『八戸市公報』と市民生活

第二章　手記と日記

第一節　学徒動員　第二節　戦時の日記

第三章　空襲・戦闘と敗戦

第一節　八戸地域に陣地を建設　第二節　八戸基地の兵器

第三節　海防艦「稲木」の戦闘

第四章　体験と記憶

第一節　庶民の戦争　第二節　少国民（少年少女）の戦争

第三節　兵士などの戦争

第一章では、大政翼賛会が発足した昭和十五年後半から戦後にかけての十数年間にわたって発行された『八戸市公報』を採録し、戦争に動員されていく八戸市民の様子、戦後の配給や進駐軍を迎えるに当たっての留意点等、市民生活の実態が紹介されている。

第一章がパブリックなメディアである『八戸市公報』から戦争の実情を描いたのに対し、第二章では「手記」や「日記」という個人的な記録をもとに、戦時中の庶民の暮らしや生活意識を紹介している。「第一節学徒動員」では、青森県立八戸中学校五年の小野寺源太郎が動員先の三菱重工業株式会社川崎機器製作所で綴った、昭和十九年八月十一日から翌二十年三月三十一日までの手記を紹介している。「第二節戦時の日記」では、種差防空監視哨に女子挺身隊として動員された石橋カネによる昭和二十年一月一日から同年十月八日までの日記と、国民学校の教員であった大久保源太郎による昭和十六年十二月一日から同月三十一日までと昭和二十年一月一日から同年八月十五日までの日記が紹介されている。

第三章では、アメリカ国立公文書館が所蔵する資料から、八戸市に司令部が置かれた「独立混成第九十五旅団」の組織や兵器、旅団の編成と兵士数、旅団が八戸地域に設置した陣地の兵器等を紹介している。また、昭和二十年八月九日早朝に起きた蕪島脇に停泊していた海防艦「稲木」とアメリカ軍の艦載機との戦闘に関する資料が掲載されている。なかでも、アメリカ側が爆撃のために作成した八戸市地域に関する機密報告書を見ると、地理や交通機関、工場施設に関してかなり詳細に調査していたようで、その情報収集力に改めて驚かされる。

第四章では、「既存の歴史の表面に、公式的に現れてこなかった声に耳を傾け、それを基点に歴史記述の枠組を繰り返し問い直す」ために、八戸市史編纂室が市民から募集した体験手記を掲載している。寄せられ

た約五十編の中から、「庶民の戦争」、「少国民（少年少女）の戦争」、「兵士などの戦争」とに分類しその一部を紹介している。

本編刊行のきっかけは、戦後六十年を迎えた平成十七年（二〇〇五）、八戸市博物館による戦後六十年特別展「戦争と八戸市民」図録『戦争と八戸市民～苦難とともに～』が刊行され、さらに同特別展の関連イベントである「戦争体験を語る会」の開催、戦争体験集『戦時下の八戸市民』の刊行、八戸市老人クラブ連合会による『戦中戦後を語る』の刊行等、戦争の記憶を後世に伝える活動が相次いで成されたため、その成果を一つにまとめようということであった。『戦争』そのものを集約的にとりあげた資料集は、青森県内の自治体史では、本書のほかには『青森県史資料編　近現代４　昭和恐慌から「北の要塞」へ』があるのみで、重要な視点と思われる。ただし、「あとがき」にあるように、これまで全く知られなかった「八戸特攻隊」の資料等が紙幅の関係で掲載できなかったとは、あまりに惜しい。続編なり補遺なり、何らかの手当てを期待したい。なお、本巻には国土地理院発行の八戸市域の数値地図に「旧陸軍構造物（陣地）」の地点をプロットした付図が備えられている。

両巻とも、テーマ別資料編としてその内容を深く掘り下げた読み応えのある編集であり、市民講座や学習会等の多くの機会においてテキストとして利用されることを望む。

（Ｂ５判、『都市計画』四三六頁、『戦争』四二〇頁、八戸市、二〇一一年、いずれも五六〇〇円）

（たけむら・としや　青森県立郷土館学芸課学芸主幹）

本会機関誌『弘前大学國史研究』への投稿について

投稿規定

◎論　　文　四百字詰　60枚程度を原則とする（縦書き、以下同様）

◎研究ノート　四百字詰　20枚から30枚程度

◎研究余録　四百字詰　10枚程度

◎史料紹介　四百字詰　10枚から30枚程度

◎その他（書評・研究動向・歴史随想など）四百字詰　10枚程度

◎ワープロでの執筆に際しては、一段に付き32字×23行で組んで下さい。字数は右の規定の範囲で計算して、それを越えないようにして下さい。

◎フロッピーディスクによる投稿も可能です（事前に編集委員会へ御相談下さい）。行数・字数は、ワープロ執筆と同様に組んで下さい。なお、プリントアウトした原稿を添付のこと。

◎横書きを希望する時は、あらかじめ本会へご相談下さい。

◎原稿締切　一月末日と八月末日の年２回

※投稿に際しては、図表を最小限におさえ、完成原稿でお願いします。また、原稿は必ず御手元でコピーをとって保存しておいて下さい。投稿は本会会員に限ります。

※掲載については、原稿を受領後、編集委員会で審査し、一ヶ月以内に御通知します。なお、文中に掲載許可を必要とする写真・図版等を含む場合には、掲載決定後、著者の責任において権利者から許可の承諾書を取得して下さい。

※掲載分の論文等については、抜刷50部をさしあげます。

※本誌掲載の論文等を転載する場合は、本会の諒承を得て下さい。